

「教育臨床総合研究 9 2010研究」

鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究

A practical study of the outreach for music listening

河添達也* 小川彩由子**

Tatsuya KAWASOI Ayuko OGAWA

要旨

2008年度から島根大学大学院教育学研究科は新カリキュラムをスタートさせた。本研究は、その新カリキュラムの一環である「教科内容構成実践研究」において、従来の音楽科の鑑賞の授業に、音楽アウトリーチ活動を組み込むことを目的とし、音楽アウトリーチ活動と鑑賞の授業の新しいかかわり合いの可能性について試みた実践研究である。

【キーワード】 音楽アウトリーチ活動、鑑賞授業、弦楽器、木管楽器

I はじめに

アウトリーチ（英語：outreach）とは、辞書では、「①手を伸ばすこと、②手の届く範囲、③（特に改宗のために）コミュニケーションをとりながら、教化、教育すること」と定義されている¹⁾。芸術分野でのアウトリーチ活動とは、芸術家や芸術団体、芸術機関が、普段芸術に触れる機会の少ない人々に働きかけ、芸術を普及する活動という意味である。現在、音楽アウトリーチ活動は数多くの地方自治体や学校等で行われるようになり、注目度を高めている活動の一つとなっている。

一方、従来の音楽科の「鑑賞」の授業は、CDやDVDなどの音源を子どもに聴かせ、どのように感じたか等の感想を書かせるというスタイルが一般的であった。そこでは授業展開の画一化と、デジタル音源による疑似体験に終始するという問題点があった。そこで、「鑑賞」の授業にゲストティーチャーを招き、音楽アウトリーチ活動を取り入れるという実践が近年盛んに実施されるようになってきた。しかし筆者は、ゲストティーチャーの演奏をただ聴かせるだけという授業スタイルの教育的効果に疑問を持った。音楽アウトリーチ活動をする側もされる側（子ども）も、相互に刺激や影響を与え合う、演奏者との協働によってはじめて可能になる新しい音楽アウトリーチ活動の可能性を探りたいと思ったのが、本研究の動機であった。本論では、音楽専攻学生をゲストティーチャーとして行なった「鑑賞」授業の実践を詳述し、その成果と課題について考察を試みる。

*島根大学教育学部芸術表現教育講座

**島根大学大学院教育学研究科

Ⅱ 研究目的と方法

1. 研究目的

本研究では、教育的効果を持った新しい音楽アウトリーチ活動の可能性を探り、その実践をおこなうことが目的である。

2. 研究方法

まず、島根大学教育学部附属中学校（以下、附属中学校）での授業観察や、1000時間体験学修等の体験をもとに、具体的な授業内容の立案を試みた。その後、大学院教育学研究科授業題目である「学校教育実践研究」の一環として、附属学校で授業実践をおこなった。

Ⅲ 附属学校における授業実践

本実践研究では、附属学校での授業観察ののち、2度の授業実践をおこなうことができた。まず、本実践研究でおこなった授業観察の概要を記載する（表1）。

表1

授業観察期間	2008年9月～2009年2月
観察対象	附属中学校生徒
観察時間	28時間

次に、附属学校でおこなった授業実践を紹介していく。実践①は附属小学校、実践②は附属中学校で、表1の授業観察期間内に併行して実施したものである。

1. 実践① 弦楽器を用いたアウトリーチ型「鑑賞」授業（計12時間）

まず、附属小学校の担当教員と打ち合わせをおこない、前回の「鑑賞」授業の内容を把握した。前回の授業では、「弦楽器の学習」を題目とし、＜愛の挨拶＞と＜ピチカート・ポルカ＞を教材に用いて、節の違いを感じ取らせる授業であった。児童はCDの演奏を聴いて、2曲の違いを感想に書いている。研究者は、演奏者との協働によるアウトリーチ型の授業をその発展学習として位置づけ、その実施や記録に必要な教材物等の確認とゲストティーチャー（ヴァイオリン奏者）の手配をおこなった。以下、授業内容を記載する²⁾。

始めに、今日はゲストティーチャーを招いての授業だということを児童に説明してから、前回の授業のふりかえりをおこなった。「メロディーが違くと演奏の仕方はどう変わる？」との教師の問いに、児童からは以下のような発言がみられた（表2）。

表2

＜愛の挨拶＞	＜ピチカート・ポルカ＞
<ul style="list-style-type: none"> ・なめらかだった ・やさしい感じがした 	<ul style="list-style-type: none"> ・元気 ・音が切れてる ・スタッカートだった

表2から、児童の多くは、＜愛の挨拶＞と＜ピチカート・ポルカ＞の特徴の違いを感じ取っていることが分かる。また、教師は2曲の楽譜を児童に見せ、記譜法の違いにも目を向けさせていた(写真1)。



(写真1)

そしていよいよゲストティーチャーの登場である。今回は、鳥根大学教育学部音楽教育専攻学生をゲストティーチャーとして迎えた。ヴァイオリンを持ってのゲストティーチャーの登場に、児童からは「おすごい、ヴァイオリンだ」などと歓声が起こった。それから実際に＜愛の挨拶＞と＜プリンク・プランク・プルンク＞³⁾の生演奏を児童に聴かせ、何が違ったかを問いかけた。この場面で児童から出てきた意見を表3に示す。

表3

＜愛の挨拶＞	＜プリンク・プランク・プランク＞
<ul style="list-style-type: none"> ・弓を長く使ってた ・弓を端から端まで使ってる ・先生が揺れてた ・先生の体がよく動いてた ・弓があった方が幻想的だった 	<ul style="list-style-type: none"> ・指をあまり動かさなかった ・はねる感じがした ・弓がなかった

表3の意見から、児童はヴァイオリンの生演奏を聴き、視覚的に2つの楽曲の違いを感じ取っていることが分かった。また、「生演奏だと、先生(ゲストティーチャー)の弓の使い方がよく分かって、曲の様子がよく伝わるね」という教師の声かけに対し、「CDでオーケストラとか聴くとなめらかだけど、ヴァイオリンだけで聴くともっとなめらかだった」、「生演奏だからでしょ」、「迫力があった」等の児童たちの活発な意見のやりとりがみられた。



(写真2)



(写真3)

写真2は、弓を使って弾く奏法、写真3はピチカート奏法（弓を使わずに、指で弦をはじく）である。写真からも、ゲストティーチャーの演奏する姿を、児童たちが熱心に見ている様子が分かる。

その後、ゲストティーチャーによってヴァイオリンの楽器紹介をした。その間も児童からは積極的に質問が飛び交った。例えば、「弓を短く使って演奏するとどうなりますか？」という質問があり、それに対し、他の児童から「それは難しいと思うよ」等の意見があった。そこで実際に＜愛の挨拶＞を、弓を短く使って演奏してもらったところ、とても弾きにくそうなゲストティーチャーの姿を見て、「やっぱり難しいんだ」といったようなよめきが学級全体に起こった。また、「短い時はすぐ変えなきゃいけない（弓を返さなきゃいけない）けど、長いときはたっぷり使うんだね」という児童の発言もみられた。以上の児童の発言からも、視覚的に演奏法の違いを理解できていることが分かる。

最後に、児童にワークシートに感想を記入させた。以下にその一部を挙げる。なお、下線は研究者が後から付け加えたものである。

- ・ヴァイオリンを生で初めて聞きました。「あいのあいさつ」は、CDで聞くよりもひびいていて、びっくりしました。それから、「プリंक・プランク・プルंक」を聞いた時は、ヴァイオリンは、手だけでもひけることを初めて知りました。
- ・今日は、じっさいに聞いてみました。CDとはちょっとちがってなめらかでした。「あいのあいさつ」は、ゆったりなめらかだったけど、「プリंक・プランク・プルंक」は飛びはねるようでした。とっても元気でした。頭の中で（ちょっとやってみたい）と思いました。それに、バイオリンのことをよく知りました。
- ・あいのあいさつは流れるように、ひいていました。でも、プリंक・プランク・プルंकは、はねるようにひいていました。それでわかった事で、弓はあいのあいさつをひくとき、一時も弓とバイオリンをはなさずにひいてだし弓を、弓いっぱい長く使っていました。その分プリंक・プランク・プルंकは弓を使わずに、ひとさしゆびだけでひいていてスゴイと思いました。
- ・今日は、1年生の教生の先生にバイオリンで「あいのあいさつ」と「プリंक・プランク・プルंक」をひいてもらいました。
実さいに見ると表じょうやひき方がよくわかりました。
二つの曲は、やり方がぜんぜんちがっていておもしろかったです。

以上の感想の下線部分からも、生の音を提供するという音楽アウトリーチ活動の効果を伺うことができる。また、＜愛の挨拶＞、＜プリंक・プランク・プルंक＞の楽曲の違い、演奏法の違いについての児童の感想が多く見られたため、以下にそれをまとめた（表4）。

表 4

楽曲に関する記述	
<愛の挨拶> ・ひびいていて、びっくりしました ・ゆったりなめらか ・流れるように、ひいていました ・一時も弓とバイオリンをはなさずにひいていたし弓を、弓いっぱい長く使っていました	<プリンク・プランク・プルンク> ・手だけでもひけることを初めて知りました ・飛びはねるよう ・とっても元気 ・はねるようにひいていました ・弓を使わずに、ひとさしゆびだけでひいていてスゴイ

前回の授業で、児童はCDの演奏を聴き、<愛の挨拶>はゆったりとなめらかで、<ピチカート・波尔カ>は元気にはねる感じ、という節の違いを感じ取ってはいた。そして今回、実際の演奏を聴いたことで、前回の授業でそれぞれ感じた違いを、より明確に児童自身の中で理解できたことが、表4から伺える。

2. 実践② 木管楽器を用いたアウトリーチ型「鑑賞」授業（計10時間）

今回は研究者がT1となって、附属中学校で実践をおこなった。

まず、準備段階として、授業内容を大まかに構成した後、略案を作成した。それから、授業で使用する楽譜の準備、生徒に配布するワークシートの作成（巻末資料1）、オーボエ奏者の手配をおこなった。今回も教育学部の音楽教育専攻学生に協働を依頼した。

以下、研究者が作成した略案（巻末資料2）をもとに、授業の流れを紹介していく。

授業者（研究者）は、まず生徒にワークシートを配布した。このワークシートは、授業の流れに沿って、生徒たちが書き込めるように作成したものである。その後フルート演奏（研究者）が、チャイコフスキー作曲<くるみ割り人形>より、葦笛の踊りを演奏した（写真4）。次にゲストティーチャーにオーボエを演奏してもらった。曲は、同じくチャイコフスキー作曲<白鳥の湖>である。



（写真4）

フルートとオーボエの音を聴かせた後、楽器紹介をおこなった。ここでは、簡単にフルートとオーボエの楽器の特徴を挙げていった（表5）。

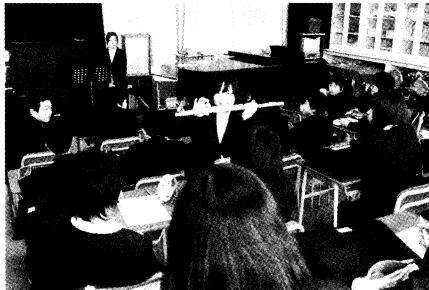
表5

フルート	オーボエ
・共に木管楽器	
<ul style="list-style-type: none"> ・エアリード ・吹いていると息がもれる ・現在はほとんどが金属製 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダブルリード ・息が吐けなくて苦しくなる ・現在も木製の楽器が多い

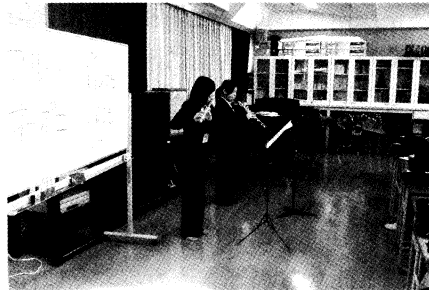
表4の特徴を挙げるだけでなく、楽器がどのような構造をしているのかも、机間支援をしながら説明していった(写真5)。

次に、研究者とゲストティーチャーで「息伸ばし対決」をおこなった(写真6)。これは、フルートとオーボエのどちらがより長く息が続くかを生徒に考えさせるものである。それぞれの楽器の特徴をつかんだ上で、どちらがより長く息が続くのか生徒に予想させた後、挙手させて大体の人数を把握した。ほとんどの生徒がオーボエの方が長く続くと予想していたが、若干名、フルートの方が長く続くと予想していた。

比較がしやすいよう、＜白鳥の湖＞を、フルートとオーボエで同時に演奏した。その際、ゲストティーチャーには、なるべく息つぎをせずに、ワンフレーズ吹ききってもらおうよう打ち合わせておいた。



(写真5)



(写真6)

最後に生徒にワークシートに感想を記入させた。以下は、その一部である。

- ・最初はフルートの方が長くひけたり、のびるかんじの音が出ると思っていたけどオーボエの方が長くひけ、のびる音が出るということが分かりました。
同じ木管楽器だけどこんなに違うところがあるんだなと思った。フルートの良さもオーボエの良さもよく分かりました。他のいろんながっきも知りたいです
- ・フルートもオーボエもすごいい音をだして、木管の仲間で、たいしてちがいはないと思ったけど、いっしょに演奏したときに、息つぎであんなちがいがあって、すごいと思った。

以上2人の生徒は、フルートとオーボエの息つぎの違いから、2つの楽器の特徴を理解したことが伺える。

- ・ 2つの楽器の演奏を聴いた最初の印象はfluteはのびやかな感じでoboeはしなやかな感じでした。

fluteは息の流れがスムーズでさわやかな音がとんできます。そしてoboeはやわらかなひびきがあって落ち着いたふんいきがあります。

どちらの楽器も聴いている心地よさがありました。

- ・ 今回の演そうで思ったのは、同じ木管楽器なのに、全くちがった形や、音がでていて、すごいと思いました。フルートは、きれいなねいろで、何回も息つぎをしなければいけなくて、1つの穴をおさえたら2つや3つの穴がふさがったり、とても精密で、これを木でしたら、どんなふうになるんだろう？と思いました。オーボエは音も深みがあって、とてもきいていて全く同じ音がなく、1つ1つの音がちがう気がしました。

この2人の生徒の記述からは、主にフルートとオーボエの音色の違いに注目することで、2つの楽器の特徴を理解したことが伺える。

IV 成果と課題

1. 成果

これまでのアウトリーチの変遷や先行事例の研究を行ってきたが、そこから、演奏者との協働による新たな「鑑賞授業」の可能性を模索していた研究者にとって、今回、附属学校で実際に授業をおこなうことができたことが何よりの収穫であった。また、この実践によって「鑑賞」の授業に対する子どもの姿勢に主体性が見られるようになったこと、さらにゲストティーチャーとして参加した演奏者側にも新鮮な刺激を与え、両者間を往還し、継続性の可能性をもつ新たな授業方法の可能性を伺い知ることもできた。なにより、演奏者が授業の場に実際に居るからこそ可能な授業展開があること、そしてそれは、児童・生徒にとってきわめて有効な学びの場となる可能性が有ることが、実感できた。例えば、CD等の音響機器では、演奏が曲の中の有る特定の楽器だけを抜き出して聴くことは不可能で有るが、演奏者がいれば、特定のパートだけをピック・アップして演奏することもできる。また、今回実際にあったように、児童の要請によって、指定の奏法とは異なるやり方で演奏し、その違いを比較して聴取することも可能になる。このようなインターラクティブな対応は、豊かな感性を培う音楽教育の充実に、欠かすことのできない授業の展開となるのではないかと確信を持った。

2. 課題

音楽アウトリーチ活動を取り入れた授業実践を引き続き積み重ね、より多くの実践データを収集しなければならない。また、先行例の調査がまだ不十分なため、資料研究等の更なる調査・分析を行っていく必要がある。そして、音楽アウトリーチ活動を授業に取り入れたことによって起こる問題点⁴⁾については、本研究では具体的に触れなかったため、今後その点についても十分検討しながら、実践を積み重ねていきたい。

♪ 木管楽器に触れよう♪

1年 組 () 番 ()

♪ 木管楽器の演奏を聴こう！

チャイコフスキー作曲 <くるみ割り人形>より …楽器名 ()

チャイコフスキー作曲 <白鳥の湖>より …楽器名 ()

♪ それぞれの楽器の特徴を知ろう！！

楽器名 ()	楽器名 ()
・	・
・	・
・	・
・	・

♪ 木管楽器で対決！！！！

どちらの楽器がより長く…??

♪ 感想を書こう！！！！

演奏を聴いて感じたこと、さらに疑問に思ったことなど…

(巻末資料2 略案)

第1学年〇組 音楽科学習指導案

平成〇年〇月〇日 (〇) 〇校時

授業者…◎ 授業補助…〇

授業展開

学習活動	教授行為
<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを受け取る。 ・フルートとオーボエの演奏を聴く。 ・楽器紹介を聞く。 ・ワークシートに特徴を記入する。 ・分からないことがあれば質問する。 ・どちらがより長く息が続くか予想し、どちらだと思うか挙手する。 ・フルートとオーボエの演奏を聴く。 ・ワークシートに感想を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ワークシートを配布する。 ◎フルートを演奏する。 チャイコフスキー作曲<くるみ割り人形>より ○オーボエを演奏する。 チャイコフスキー作曲<白鳥の湖>より ◎楽器紹介をする。 フルートとオーボエの特徴を挙げる。 <ul style="list-style-type: none"> ・共に木管楽器 ・フルート <ul style="list-style-type: none"> リードは無い 現在はほとんど金属製 ・オーボエ <ul style="list-style-type: none"> リード楽器 現在も木製の楽器が多い など ◎質問がないか生徒に問いかける。 ◎○息伸ばし対決をする。 フルートとオーボエ、どちらがより長く息が続くか考えさせ、挙手させる。 <白鳥の湖>をフルートとオーボエで演奏する。 同じ木管楽器でも、楽器の特徴にかなりの差があることを理解させる。 ◎まとめをする。 ◎ワークシートを回収する。

註記

- 1) Longman Dictionary of the English Language New Edition 桐原書店 1999年1139頁
- 2) 今回の授業では、附属教員が授業をおこない、研究者は授業内容の共同提案と授業観察をおこなった。
- 3) 前回の授業では、＜ピチカート・波尔カ＞の演奏を児童に聴かせたが、ゲストティーチャーの演奏の都合上、今回は＜プリンク・プランク・プルンク＞を楽曲として選んだ。どちらの曲もピチカート奏法を用いるので、授業展開に支障はないと考えられる。
- 4) 例えば、音楽アウトリーチ活動を授業に取り入れ、子どもたちにいつも分かりやすく理解させようとする、子どもたちの「考える力」が低下してしまうのではないか、という問題点等が考えられる。

参考文献

- 1) 砂田和道
「クラシック音楽におけるアウトリーチ活動とそれに関わる音楽家養成の問題」
文化経済学会<日本>『文化経済学』 2007年3月 第5巻第3号
- 2) 林（近藤）睦
「音楽のアウトリーチ活動に関する研究 — 音楽家と学校の連携を中心に —」
大阪大学大学院文学研究科 博士論文 2003年3月
- 3) 東りさ
「地域におけるアウトリーチ活動（音楽）の現状と課題
— 島根県および島根大学教育学部の実践研究をもとに —」
島根大学大学院教育学研究科 修士論文 2008年
- 4) 山本美美
「音楽鑑賞に関する一考察」
島根大学大学院教育学研究科 修士論文 2003年
- 5) 『教育音楽 小学版』音楽之友社 2008年6月
- 6) 『教育音楽 中学・高校版』音楽之友社 2008年6月
- 7) 雑誌『文化創造 アウトリーチ Vol.14』財団法人地域創造 2003年3月
- 8) 『小学校音楽鑑賞教材開発プロジェクト 報告書』
島根大学教育学部 音楽教育研究室 小学校音楽鑑賞教材プロジェクト 2002年3月
- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008年8月
- 10) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008年9月
- 11) 『平成20年度 「学校教育実践研究」「教科内容構成実践研究」研究成果発表抄録集』
島根大学大学院教育学研究科 2009年3月
- 12) 鈴木香代子
「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性」— アウトリーチ活動の事例を追って
音楽教育実践ジャーナル vol. 7 no 2 (2010)